

パネル討議（第2部）

学術コミュニケーションの変革への関わり ―研究者、学会、出版社―

UniBio Pressの目指すものは何か

日本動物学会事務局長 永井裕子

ご紹介いただきました永井です。私たちに与えられたテーマは学術コミュニケーションの変革への関わりということですが、変革を起こすのは私たちなのか、それともまったく外から違う形で変革ということが起きてしまっているのか、さまざまな側面というものがあるのだと思います。ここでははっきり認識しなくてはいけないのは、決して商業出版を何とかしようという話ではなく、学術コミュニケーションが、ある時から商業出版による主導になってしまい、そのことで学術情報がなかなか手に入れられないほど高くなってしまったという状況を理解することだと思います。これから私が話すことは、なぜ学協会のジャーナルを最終的に私たちが売らなければいけないかという話です。ただし、やはり学問分野においてかなり相違があります。これからの話は日本の生物系に限っての話とと思ってください。

戦後からずっと、今の文部科学省は日本の学協会誌を支援しようということで印刷出版補助金というお金を投資しつづけています。これは図書館の人にはあまりなじみのない話かもしれませんが、この科研費は右上がりの曲線ですと来ています。このことが、SPARCという仕事をしていた、なかなか悩ましい話なのです。日本の雑誌は電子ジャーナル化が遅れていると言われながら、J-stageという存在によって、学協会は望めば投資なしに電子ジャーナルを出せるという、大変すばらしい状況が、日本では展開しています。生物系の学協会のパッケージを作って、それを日本から発信して、海外図書館、勿論国内図書館も含めてですが、買ってもらおうとしています。しかし、日本の学会誌を買うという意識が、国内の図書館

のなかになかったと言うよりも、むしろ学会がそういった働きをまったくしなかった。それは、印刷出版補助金という存在があり、自分たちがお金を生み出さなくても、雑誌を出せるという夢みたいな状況が日本にはあるからなのです。すくなくとも私が事務局長をしています日本動物学会は年間一千万円前後の印刷出版費、今年に限っては1510万円を国から頂いています。それが国からの評価だと思えば、確かにそうですが、そこから離脱したいというのが、動物学会の考えです。学会が自立的であるというのが、どういう意味を言うのか、ということがこのUniBio Pressという電子ジャーナルパッケージを作ってから、ずっと私のなかでは命題としてあります。国からの補助を受けることが悪いというわけではありませんが、学協会の自立意識は育てられなかったことは確かです。

SPARC/JAPANの中で、去年応募し、採択していただいた三つの生物系学協会でも自主的なパッケージを作りました。大事なことは、自主的という意味です。商業出版社と一緒に電子ジャーナルの説明会に出るようなことも、この仕事をするようになってからありましたが、いったいどの学会がどういう雑誌を入れていて、それが何なのかということが全く、商業出版社の説明では見えません。千タイトル以上入っているパッケージの一つ一つを説明するということはある得ないわけで、商業出版社が学術誌を売ることと、学協会が自ら雑誌を売るのは根本的に違うものだと思います。ここで皆さんにご理解いただきたいのは、学協会が自ら自分たちの雑誌を売ることと大変意味があるのだということです。それぞ

れの学協会が、それぞれの学協会員がいる中、異なる考え方を持ちながらも、自分たちの雑誌を売りたいという意志を持つことが大事なのです。そこに何があるのかというと、学会そのものが学術情報の担い手であるという認識です。SPARCの思想から言えば、これにつながるのが、図書館員であり、研究者であると思います。研究者の賛同がなければ、日本ではなかなかこの学術コミュニケーションを変革していくのは難しいことだと思います。日本動物学会は115年、面々と続いている学会で、Zoological Scienceは前掲誌を含むと115年の歴史を持っています。ヨーロッパでは大変人気があり、Zoological Scienceを買いたいという海外購読館は多い。しかし、最終的になぜ海外出版社に行かなかったかということ、それはさきほどの科学研究費との関わりです。国から補助を受けながら、海外出版社に渡してしまうということが、どうしても納得できなかったということが本当の気持ちです。もう一つは、私たち自身が何も努力をしていない。どうしようかという意識もない。つまり、多くの学協会のように、来年また科学研究費補助金がくれば雑誌が出せる。会費を足してですけれども、出版できるという状況のなかでは、ほとんど何も考えなくても良いのです。では海外出版社に行き、私たちは本当の意味でのZoological Scienceという存在を出せるのかというのが、私が十年前から思っていたもうひとつのことです。現在、Unibio Pressは、IPアドレスによるアクセス認証、同時アクセス数は無制限で提供しております。エンバゴ(embargo)の問題もあり、契約終了後のアクセス保証などのさまざまなシステムを我々もこれから作っていかなければいけないと思います。

大事なことは、学協会が自立をするお金と図書館が思っている値頃感というのが、一体どこで折り合うのかということです。金額は、来年は7万円を予定しています。今、3タイトルですが、タイトル数は増える予定です。これがあまりにも安く、ある意味では笑われてしまうような話になっ

ているのですが、これを考えるにあたってはすごく悩みました。BioOneという、私たちが目指すべき電子ジャーナルパッケージがあります。ARLの支援によって始まったものですが、67タイトルを収録しており、国内ではそれなりの値段だということがあるのですが、東大クラスで百万円と聞いています。(UniBio Pressを)30万円で売れば良いのではと言われもしましたが、やはりそこまでの値段はつけられませんでした。

またUniBio Pressを作ったことで、参加学協会の会員の人に必ずいいコンテンツを出して欲しい、そうでなかったら物は売れない、と言えるようになったという事はものすごい事だと思います。日本発の雑誌がなかなか育たないと言いますが、それはやはり、自分たちの雑誌がよいコンテンツを出そう、それを世界に発信しようという意識が、ある部分希薄だったからだと思います。現在、UniBio Pressでは3タイトルを提供していますが、それぞれのEditor-in-Chiefが必ずいい論文を掲載するからと言ってくださり、そうでなければ図書館にやはり売れないと思っています。5万円と言うと、なんて安いと思われるかもしれませんが、小さな段階で終わるのではなくて、これから次第にタイトルを増やし、UniBio Pressを買うことで日本の生物学の状況が解るというような電子ジャーナルパッケージにすることが目標です。そのためには、私はやはり、商業出版社には行きたくはありません。なぜかという、やはり商業出版社のやり方では、何と言うか、私がやっているような苦しみはほとんどないわけですね。ネームバリューがあって、うちで売りますという、それが大変にやはり研究者には良いことになるわけですね。

多くの海外出版社に行った学協会の雑誌が、あいかわらず科学研究費をもらい続けているという状況があります。海外出版社に国の税金がそのまま、つまり出版費として行ってしまう事実はどうなのでしょう。先ほど私が何度も言ったように、Zoological Scienceそのものは21年間で2億円近い税金をもらっている。それで、本当に

外に出て、あまりあるメリットが私たちの所に返ってきて、国に対して言い訳ができるのだったら

いいのですが、そのようなメリットが私にはどうしても見えてこないのです。

(ながい ゆうこ)

いくつかの数学学術誌の電子ジャーナル化への対応

京都大学数理解析研究所教授 森 重 文

森と申します。いくつかの数学の学術誌で電子ジャーナル化にどう対応しているかということを報告したいと思います。

まず、前置きをしたいと思います。どうして日本の多くの大学の数学教室が雑誌を出版しているのか。それは戦後にお金がなかったときに、外国の雑誌をどう買うか、その手段として、こちらで雑誌を出版して、それと交換するという形で、外貨がない時代に雑誌を購入することができた、そういう歴史があります。そういうことがあるので、多くの大学で数学教室が雑誌を出した。京都大学の場合でも、数学教室が京都ジャーナルというのを出版していますし、数理解析研究所でも Publications of RIMS というのを出版しています。

さて、数学論文の特徴ということで言いますと、論文の引用半減期、寿命だと思っていただければよいのですが、これが非常に長い。他の分野と比べて非常に長い。具体的な数字は、統計資料と言われると分かりませんが、たとえば数十年前の論文とか100年前の論文が、歴史的価値でなく、学術的理由で引用されるということが日常茶飯事です。その当然の帰結ですが、バックナンバーの利用度が高い。数学者にとって、雑誌というのは、単に本というだけではなくて、数学的実体がそこにあるのです。ですから、中央に集めれば良いと言う人も多いかもしれませんが、実験科学で実験室がすぐそばにあるように、数学ではすぐそばに数学の雑誌、本が必要です。

あと、他の分野との比較で、良い論文が一部の雑誌に集中的に投稿されるかということそうではな

く、割と散らばります。一方、例えば物理で Physical Review Letter という雑誌はページ数が非常に多くて、年に何千ページという量が出る。研究者はそれを読むことを期待されている。そうすると、何千ページか読みますと、他のものは何も読めません。評価してもらうためにはそこに投稿するしかないという状況の様です。それに比べると、数学というのは、ひとつには寿命が長いし、数学者は極楽トンボなのかもしれませんけど、ちゃんとした仕事をして、ちゃんと発表しておけば、ちゃんと評価される。そういう能天気なやり方でやってきて、実際にそれで機能してきています。

日本の数学の国内誌ですけど、世界的に見て健闘していると言って良いと思います。これは抽象的な表現ですから、たとえばトップの数誌の学術誌に入っているかと言えば、そうではないかもしれません。例えば、いろいろな学術誌、Publications of RIMS でも、名古屋ジャーナルでも、学士院紀要でも、外国からの投稿は日常茶飯事というか、しごく当然のことです。外国から当然のように投稿された論文をきちっと審査して出すという、そういう意味で、世界的標準で見て恥ずかしくない編集をして、胸を張れる学術誌が出版できています。

日本のほかの分野は分かりませんので、数学に関してだけ言いますと、日本の雑誌は、投稿して掲載可となった時に、別に何も著作権をくれということもなく単にそのまま出版していました。ということは、厳密に言うと著作権は著者の手元にあるわけです。雑誌は、出版権を持って出版する